

講演会

「気かけあうまちをつくる」

～多世代交流の実践～

開催レポート

【概要】

町では高齢者福祉センター「寿楽」の改修工事を予定しています。1階は新たに学童保育クラブを併設し、多世代交流施設として計画します。2階は高齢者福祉センターとして現状の機能を残しつつ、リニューアルを行います。

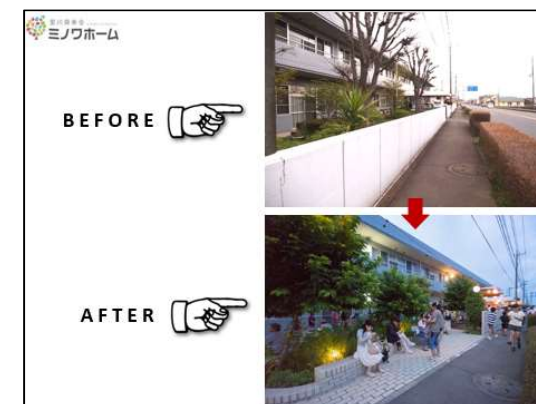
高齢者や子どもたち、子育て世代など幅広い方の交流拠点とし、地域の居場所として親しまれ、結果として高齢者の健康増進や地域福祉の向上、子どもたちの安心・安全な環境づくりを目指しています。

今回の講演会は、特別養護老人ホームを囲む壁を取り払うことで、まちへ開いた「福祉・介護」がどのように地域とつながり、地域コミュニティへどのような化学変化を与えたか、福祉と地域コミュニティという観点から講演いただきました。

町の施設の新たな居場所をつくるためのヒントを探りましたので重点ポイントについてレポートします。

講 師 : 社会福祉法人愛川舜寿会 常務理事 馬場 拓也
実施日時 : 令和5年1月28日(土曜日) 午後1時30分～午後3時
実施会場 : 瑞穂町役場庁舎1階ホール
参加者 : 20名

ポイント①：「気にかける」ことでまちやひとがつながる



これまでの福祉は、高齢者にやさしく、障害者にやさしく、こどもにやさしく、という支える側からの手を差し伸べるような立ち位置だったのではないか。超高齢者社会の現在、福祉・介護の専門職だけでは支えきれない状況がある。

「社会」の人たちが「福祉・介護の利用者ならびに福祉職」になんらかの影響を受けて、「社会」全体がちょっとやさしくなれないか。社会「に」ではなく、社会「を」やさしくしていく活動をする。そのために、「福祉の見える化」を意識した活動を行っている。

特別養護老人ホームを取り囲む壁を取り払い、ブラックボックスになっていた福祉的な生活や活動の一部を可視化した。壁の取り払いは地域の人や職員が共同で行い、双方の意識変容のきっかけづくりだった。

壁を取り払うことで「福祉」をまちの風景とした。すると、福祉とは関係のない人たちが庭先で時間を過ごすようになり、気かけ合う相互作用も起きた。少しずつ地域社会とのつながりが生まれてきた。

ポイント①：「気にかける」ことでまちやひとがつながる



【こんな日常がある...】

車いすのおばあちゃんが施設内の窓から手を振る。こどもを抱っこした母親が施設の窓に近づいて、窓越しでタッチする。職員が外に連れ出してベンチでおしゃべりがはじまる。そんな日常。

いつも施設の庭でたばこを吸っているおばあちゃんがいた。毎朝の通学であいさつを交わしていた中学生。何年か続き、あるときからおばあちゃんの姿が見えなくなった。「体調でも悪いのかな」とその中学生は心配をした。その光景をずっと見てきた職員が中学生に声をかける。壁があったときは、何の関係もない地域の中学生が、壁を取り払うことで施設内のおばあちゃんを気に掛けることになっていった。

こんな風景が日常の中に溶け込んでいくことができれば地域は何となく温まるのではないかな。

【「気にかける」ことでまちやひとがつながる】

高齢者や子どもは施設の中で閉じこもるではなく、福祉・介護の営みを外に見せていくことで何かが変わるのではないかな。分断するのではなく、日常の中でみえる環境を整えることで、幅広い世代の地域コミュニティの活性につながるのではないかと可能性を感じた。

ポイント②：ケアは常に相互である



子どもたちが認知症の高齢者が店番する駄菓子店で買い物をしたり、宿題をしたり。外国人や障がい者とのふれ合いが自然に行われている施設。神奈川県愛川町にある複合施設「春日台センターセンター」。

小さいころから多様性に対してのネイティブになる。その子の人生にいろいろな種がまかれている。派手さはないけれどそういった小さな革命が地域を変えていくのではないかな。

【ケアは常に相互である】

ケアを必要としているのは高齢者に限らないということがみえてきた。

多世代の交流が生まれ、高齢者と子どもたち、子育て世代がちょっとした日常の中で気にかかけあうことでケアは相互性を高める。

高齢者、こども、子育て世代とそれぞれを枠で囲ってしまうのではなく、自然と同じ時間を共有できるように共有空間や居場所を創出することが地域のケアにつながるのではないかと可能性を感じた。